

作品解説

- 3. 中野 友紀子
- 17. 小幡 智子
- 18. LISA KUDO
- 19. 堺 浩一
- 21. 村山 直子-Lori-
- 24. 栗原 千明
- 26. 安達 俊哉
- 36. 石川 電啓
- 41. yumi
- 47. Keiko Iwakuma
- 48. 石上 和寿也
- 49. 淵上 真友美
- @50. ひより。

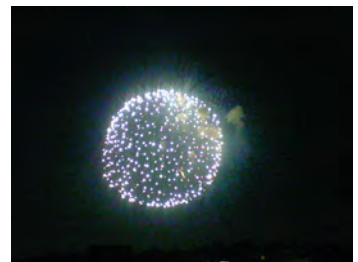
画素

FOMA N904i

320 万画素

169×225

この小さな小さな粗い粗い画像達に
一喜一憂していた 2008 年夏
南河内で開催された P L 花火
画素が脳で変換され記憶が再現される
中野友紀子



老婆Ⅱ 34°44`N 135°71`E

小幡智子

彼女は北緯34度44分東経135度71分に、辺りを払って威風堂々と、しかし他者への慈しみを滲ませて1人立つ。もう何年時が彼女を通り過ぎたのか、本当のところは誰も知らない。もうあと何年彼女がそこに立ち続けるのか、誰にも分からない。

ジムのスパで老婆たちの変容した肉体に目を奪われ、圧倒的な時の流れと残酷さを思い知り、その姿に心が囚われた私に、老いも悪くないよと彼女が微笑む。

彼女への愛と尊敬を込めて。



(実はこの作品は、卒業制作↑がF150号で夏期スクーリング後大き過ぎて家に持ち帰れなかったため、冬期スクーリングまでの間に家で描いた習作です。習作でも私にとっては輝く一作品です。)

LISA KUDO

WHEN TEARS TURN INTO LIGHT



工藤 里沙
涙が光に変わるとき

The tears caught by the fallen leaves turn into light.
A bird with the light fly beyond dimensions.

落ち葉たちが受け止めた涙は光に変わる
鳥はその光と次元を超えて飛ぶ





海陽 ～南紀にて 作・堺浩一

この海の果てまで行けば この輝きを布く陽へ辿り着けるものだろうか
ある日ふと試してみようものならば
たとえそれが小さな漁船であったとしても その船を出してしまうのかもしれない
そしてそこに辿り着いた時にきっと知るのだ
輝きを注ぎ集めているものは 実はこの足元にすべてあることを
波打ち際を踏みしめる裸足に 潮騒が触覚としてさざめきだす
陽はそのすべてを注ぎ それを宿した海の懷は輝きに満ちた潮を寄せる
ここを出ていけばここへ流れ着く そうであっても行けばいいと海の道は言うのだろう
ならばいまここに せめてひとことこう記しておけばいい
南紀にて

【作品解説】

執筆中の小説の取材と称して和歌山県・南紀(白浜・田辺)に滞在した時に撮りためた写真を使用したフォトコラージュ作品です。小説よりも先にこちらが完成してしまったという訳です。そこからさらに詩作したのが、上的一篇です。本当は作品に組み入れるつもりでしたが、どう試してもビジュアルを邪魔してしまい、断念せざるを得ませんでした。もしよろしければ、こちらの世界観もお含みおきいただきながら、作品を鑑賞いただければ幸いです。

作品介绍 作者 村山直子—Lori—

タイトル “光の使者 II”

使用カメラ Ricoh Theta Z1 (360度カメラ)

撮影場所：室生山上公園 芸術の森

Ricoh Theta 公式写真展に入賞した作品を、3D ホログラムプリントにしました。



タイトル “Fall Sunshine”

使用カメラ insta360 One RS 1-inch 360 edition (360度カメラ)

撮影場所： 馬見丘陵公園

秋の柔らかな光と紅葉と組み合わせの 360 度写真です。

作者紹介

写真学科 4 年 (2 年目)

360度カメラ、Ricoh Theta/ insta360 を使って作品作りをしています。まだまだ世間的には認知度が低く、作品を作っている人も数少ないですが、「360度カメラでもできる」「360度カメラだからこそできる」作品を目指して作っていきたいと思っています。

受賞歴 (いずれも 360 度写真)

2018 年 Ricoh Theta 公式写真展 Beauty is all around 入選

2019 年大阪光の饗宴フォトコンテスト 入選

2020 年リコーイメージングフォトコンテスト Theta 賞受賞

2021 年 Ricoh Theta 公式写真コンテスト 入選 (3 作品)

2021 年リコーイメージングフォトコンテスト GR 部門銅賞受賞

2022 年 Ricoh Theta 公式写真コンテスト 入選 (3 作品)

2023 年 insta360 “No Drone No Problem 賞” 受賞 (動画)



Instagram / Twitter で Lori 名義で毎日 360 度写真を投稿しています。

よろしければご覧ください。

Love for Humanity

通信デザイン学科1年 栗原 千明

戦争 人種差別 「××人だから～」
区別が必要だと人は言うけれど
ほんとうは皆同じ人間だということを
忘れてしまってはいないか
そこに愛はあるのか？
綺麗事は言えない
戦争もいじめもなくなる
今日も地球は回る
コロナ禍で向けられたヘイト
陰キャ、陽キャ、すぐ人は分類したがる
見た目がどうだから、着てる服がああだから。性別がどうだから。国籍がど
うだから。
人種がどうだから。だから何だ？
ハダの色がそんなに重要か。
この髪の色でわたしの何がわかる？
人類への愛を忘れないように
そして私も考えたい
世界平和とか、戦争反対とか、そんな大層なことはわたしには言えないけ
ど、人々が仲良くして欲しいという気持ちを込めて描きました。主義主張に
かかわらず、色んな人に見て欲しいです。

コロナ禍の影響も落ち着き始めた 2022 年 10 月 私は 3 年振りに海外へ旅に出ました。目的はアメリカを横断しながら撮影の旅、(冒険でもある) ニューヨークを皮切りに約 1 ヶ月程、西海岸へ向けての単独ドライブです。

作品「Advance 踏み出す」

到着して NYC は生憎の雨でした。気の重い旅のスタート、ホテルのチェックインまでまだ 3 時間程ある、手に入れたばかりの LEICA をぶら下げ、ミッドタウン辺りを物色していると何とも輝かしい光景が目の前に突如と現らわれたではないですか、すかさず反応しました。これが作品「Advance 踏み出す」です。旅の幸先を占うと言うか、この旅(冒険)に背中を押してくれた様な、GIFT 様でも有りました。

NYC は 10 月に入ると気温は 10 度を下回る様になり秋が深まります。それでもマンハッタンはまだ紅葉には至ってませんでしたが、ニューヨーク州の北部レイクブラシッドへ向かう道中では、黄金色に輝いた黄葉樹や真紅に染まった紅葉樹の森が旬の美しい彩りを添え始めていました。

作品「交響楽団」はレイクブラシッドの湖畔の様子です。日の出前からカメラを構え刻々と変化する陽の光を捉えながら湖面に映る彩り、湖畔の木々、遠景の山々、澄み渡った空気、全てが整った瞬間、まさに絶力で表現している姿が交響楽団の様でした。

作品「旬の光に包まれて」はレイクブラシッド近隣のカスケードマウンテンを下山している時に中腹辺り、時刻は 16 時位(まだサマータイム)柔らかな陽の光が黄葉樹林帯を透かし、私は檸檬色のライトシェードに包まれ旬の輝きを浴びていました。

作品「luminescence (発光)」アリゾナ州のモニュメントバレーです。日没から 30 分程のゴールデンアワー帯を狙って待ち構えていました。それは、それは大地が発光しているかの様な神々しく圧巻の輝きでした。

作品「Overlapped」サンフランシスコから 1 時間程のサンタクルーズと言う所は、サーフィンが盛んな地です。輝かしい夕陽を背景にサーフボードを抱えたサーファーがオーバーラップするかの如く、現れてくれました。この奇跡に等しいタイミングはまもなく向かえる旅の終焉に花を添えてくれているかの様なタイムリーな GIFT でした。

※いづれの作品も被写体が一番輝いているそんな瞬間を捉え作品と致しました。

Title: Universe Markup



空に浮かぶ◎

地図アプリ液晶画面の内側視点から覗いた現実世界。
目的地を岩手県宮古市田老の山王岩にマークアップしてみた。
そこは1億年分の地層を1万年かけて形作られた造形。

空の向こう側は、スマホ画面とつながっている。
メタバース的価値をひっくり返して眺めてみる。

作者：石川電啓 TORU ISHIKAWA

撮影地：山王岩＝岩手県宮古市田老

撮影機材、データ：Sony α7RIV レンズ FE16-35mmF4Za/ 焦点距離 17mm/ 絞り f 4 /SS.62sec/ ISO80 比較明合成

使用機材（ドローン・ライトペイント）：Autel EVO II PRO

撮影スタッフ DRONE PEAK

ドローンパイロット1名、補助者2名、カメラ撮影1名 ※関係各所飛行許可承認済

ととのう

音のシャワーをあびて ととのってみませんか？

「ととのう」はサウナ用語で、サウナ・水風呂・外気浴を繰り返すことにより
心身ともにリラックスした状態を指します。

本作は、この状態を音で体感する **【おんよく音浴】** をコンセプトに制作しました。



この作品には、自然音・生活音・電子音・自身の身体を使って演じた音・楽器を使って演じた音など、様々な方法で集音した音たちが登場します。

制作にあたり最も大切にしたのは、すべての音を分け隔てなく愛し調和させることです。

「shoegaze」 Keiko Iwakuma

shoegazer（シューゲイザー、shoegazeとも）とは、90年代に巻き起こったUKロックのムーブメントである。下を向きながら轟音ギターをかき鳴らす様子を「shoe（靴）をgazer（見る人）」と称した。轟音ギターと幾重にも重なるフィードバックノイズの中から聴こえる繊細なメロディーなど浮遊感あふれる音が特徴であり、メランコリックかつ、微かな輝きを持った世界観が表現される。

この曲は、そのようなシューゲイザーに憧れるもギターを弾きこなせない私が、ピアノの音を元に制作したものである。元は減衰音であるピアノの音に、リバーブをかけたりエコーをかけたり、歪ませまくる等とエフェクトを使いすぎることによって、ピアノの音という原型はもはや無いが、代わりに浮遊感と憂鬱感、焦燥感が現れた。

また、個人的にシューゲイザーと親和的だと感じているドローンミュージックの音も意識し制作した。これは、古くは教会音楽の通奏低音など、音高の変化なしに持続する音を指し、うなり音を意味する。

今回、音のみと、あえて音に映像をつけたものと2つ用意した。映像はこの冬珍しく雪が何度か降り、その日に撮ったものを使用した。ちなみに、映像にある足跡とshoeと心の中で勝手に関連付けている。

ゆっくりと移り変わる色合い、あるいは、心情の変化のようなものが音で表現できていれば幸いである。

▶参照

・TOWER RECORD ONLINE <https://tower.jp/article/interview/2006/08/03/100040016/100040018>
・ドローン・ミュージック - Wikipedia



ANITYA

石上加寿也 KAZUYA ISHIGAMI

ANITYA（アニティア、アニトヤ）とは、サンスクリット語で「無常」という意味である。

全ての音には、無常の輝きがある。音は生き物のようなもので、生まれては死んでいく。

本作品は、常に変化し終わりの無い音響作品である。

様々な時間と空間の中で生成された音によって構成されている。

石上加寿也 KAZUYA ISHIGAMI

1972 年大阪生まれ。作曲家、即興演奏家。大阪芸術大学音楽学科音楽工学コース卒業。大阪市立大学大学院創造都市研究科修了。

幼児期からテープレコーダーで遊びながらカットアップ・コラージュ風の作品を作り始める。高校生の時にミュージック・コンクレートとノイズミュージックに出会い本格的にテープ作品を作り始める。1992 年から「DARUIN」名義で作品制作およびライブ演奏活動を開始。1994 年からコンピュータおよび音楽プログラミング言語 Max を使用した作品制作およびライブ演奏活動を開始。1997 年、INA-GRM（フランス国立視聴覚研究所音楽探究グループ）での夏期アトリエに参加し作品制作・発表をおこなう。1998 年、上原和夫らと共に INA-GRM のダニエル・テルツジ、フランソワ・ドナトを招聘しアコースモニウム・コンサートを神戸ジーベックホールで開催。1999 年、阪神淡路大震災を契機に結成された、神戸のアーティスト・グループ「ACTE KOBE（アクトコウベ）」の一員としてフランス・スイスへ渡航、国際交流ライブ・イベントに参加。2002 年、神戸にてアーティスト・グループ「C.U.E.」を設立し、月 1~2 回をペースにインターネット・ストーリーミング・ライブイベントを行う。同年、WDR（西部ドイツ公共放送）、国際交流基金の協力を得て、ヨーロッパにてライブツアーおよびレコーディングをおこなう。2003 年、ドイツ SR Radio などから招待を受け、ドイツにてライブツアーをおこなう。2005 年、アメリカにてライブツアーをおこなう。以降、Deutschland Radio(DR)（ドイツ公共放送）での委嘱作品をはじめ、FUTURA（フランス）、MUSLAB（メキシコ）、SILENCE（イタリア）、RADIA（イタリア）、ZEPPELIN（スペイン）、ICMC 国際コンピュータ音楽会議 2015（アメリカ / テキサス）、Music From Japan 2020（アメリカ / NY）などの音楽祭で作品上演をおこなう。

近年の活動は、

- ・仏教・神道の思想をテーマにした作品の制作
- ・「諸行無常」「不易流行」をテーマにしたフィールド・レコーディング作品の制作
- ・「音の記憶」をテーマにしたサウンドスケープ・コンポジション作品の制作
- ・自作電子楽器（シンセサイザーやノイズマシン）を使用した即興ライブパフォーマンス
- 等々

こちらの QR コードからリンクサイトへ



Drag out the dazzling Dream

現実から

夢の世界へ

夢の世界から

現実へ



「Drag out the dazzling dream」

三日月型の本に沿って左右に対称展開されている文章は、一方向に読み進めることで
現実から夢、夢から現実へと、意味が変化しながら行き来する仕掛けになっています。

夢の中の願いを、あなたの中の本の住人と共に持ち帰って来てみてください。

淵上 真友美

にちじょう

私の作品の前で足を止めてくださりありがとうございます。はじめまして、ひより。です。

この作品は、10月からの半期で書いた曲です。音楽学科の作品制作という科目の課題として書き上げました。この大学に入学してから2年半、高校までは特に音楽の勉強をしてこなかったため、本当に苦労しました。初めはレポートの書き方もわからず、音楽の知識もなく、悔しくて泣いた日も、徹夜で勉強して疲れ切った日もありました。そんな私が初めて、課題とはいえ、初めて書いたきちんとした曲がこの作品になります。もちろんつつこみどころは多々あると思います。しかし2年半の私の成長が詰まっている、私にとっては大切な作品です。

またこの半期には、約一ヶ月間の語学・音楽留学も経験し、たくさんの思い出ができました。その時の写真や日常の光景、風景を写真に収めましたので、曲を聴きながら楽しんでみてください！その時の私のドキドキやワクワクをイメージした曲になっています。

最後に、来期は半年の留学が決まっています。今度はその期間でレコーディングして作品を作る予定です。ぜひまたお会いできる機会がありましたら、その際はぜひ作品を聴いてください。

ひより。

